Sophia-R
Sophia University Repository for Academic Resources

Title	<報告>文雅の記憶：幕末・明治期文人と時代・政治・地域文化
Author(s)	福井，辰彦
Journal	上智大学国文学科紀要
Issue Date	2017-03-10
Type	departmental bulletin paper
Text Version	Publisher
URL	http://digital-archives.sophia.ac.jp/repository/view/repository/20170525029
Rights	

上智大学
SOPHIA UNIVERSITY

【報告】公開シンポジウム

文雅の記憶

―幕末・明治期文人と時代・政治・地域文化―

福井辰彦

一　シンポジウムの概要・開催趣旨

平成二十八年十一月十九日、公開シンポジウム「文雅の記憶―幕末・明治期文人と時代・政治・地域文化―」を開催した。その概要は次の通り。

○日時：平成二十八年十一月十九日（土）十四時～十七時
○場所：上智大学十二号館二〇三教室
○主催：上智大学文学部国文学科、日本漢文学プロジェクト共同研究チーム

○共催：国文学研究資料館

○プログラム：

【第一部　研究発表】「幕末・明治期文人の諸相」

・佐藤温（日本大学講師）「幕末の変革期における文人のあり方―大橋訥庵と菊池・大橋家の人々に着目して―」

・福井辰彦（上智大学准教授）、中野未緒・高橋佳菜子（上智大学学生）「明治初年の菊池三渓」

・新稲法子（佛教大学非常勤講師）「宇田栗園―乙訓漢詩壇の父―」

・長尾直茂（上智大学教授）「太宰府に遺る吉嗣拝山関係資料について」

【第二部　討議】「文雅の記憶をめぐって」

本シンポジウムは、国文学研究資料館の「歴史的典籍に関する大型プロジェクト」公募型共同研究「日本漢詩文における古典形成の研究ならびに研究環境のグローバル化に対応した日本漢文学の通史の検討」（通称「日本漢文学プロジェクト」）の一環として企画されたものである。

この共同研究の代表者である合山林太郎氏（慶應義塾大学准教授）からは、かねてより、文人研究に焦点を当てたシンポジウムを上智大学で開催してはどうか、とのご提案をいただいていた。稿者は大学院生の頃から、幕末・明治期の文人、菊池三渓の伝記研究に取り組んできた。長尾直茂教授も、明治から大正にかけて大宰府を中心に活躍した南画家・詩人である吉嗣拝山について研究を続けておられ、平成二十七年十一月には勉誠出版から『吉嗣拝山年譜考証』を上梓された。そこでこの二人を軸に、「幕末・明治期の文人」をテーマとして企画を進め

ることにした。

この分野においては、近年、新稲法子、佐藤温両氏が優れた業績を残されている。新稲氏の研究は京都・乙訓地域の詩壇を育てた宇田栗園に関するもので、いわば地方における文人の活動を跡づけるものと言える。一方、佐藤氏が対象とする大橋訥庵は、幕末の政治や思想にも深く関わった人物である。幕末・明治期における文人の多様なあり方や役割を提示するにはこの上ない内容と考えられ、このお二人をを学外からお迎えすることにした。

また、これも合山氏のご助言により、上智大学国文学科の学生にも研究発表に加わってもらうことにした。本格的な研究の場に関わることは貴重な経験となるであろうし、周囲の学生たちにとってもよい刺激になるのではないかと考えたからである。三年生の学生から希望者を募ったところ、高橋佳菜子さん、中野未緒さんが手を挙げてくれた。二人には、稿者の共同発表者として、調査や資料作成の段階から協力してもらった。

本シンポジウムのねらいや意義については、次のような「開催趣旨」を「日本漢文学プロジェクト」ブログなどを通じて公にしたので、それを転載しておく。

開催趣旨

幕末・明治期は日本漢文学が質量ともにもっとも充実した時代だったとも言われる。漢詩文の創作・享受が、地域的にも階層的にも広く普及し、多くの学者・文人・詩人たちが、全国各地で多様な活動を繰り広げた時代。しかし現在、その「文雅の記憶」は、ごく一部の例外を除けば、すっかり忘れ去られていると言ってよい。本シンポジウムでは、当時の文人たちの事績・文業を、自筆稿や書簡など一次資料を駆使しながら掘り起こすこと、

いわば失われた「文雅の記憶」を思い起こすことをテーマとする。

第一部では、幕末・明治期の文人に関する最新の研究成果について発表を行う。思想や政治との関係、激変する時代との向き合い方、地域文化における役割・意義、といった切り口から、この時期の漢文学の多様なあり方を具体的に跡づけてゆく。

第二部では、第一部の発表を踏まえつつ、いま「文雅の記憶」を想起することの意味や可能性について、来場者とともに討議したい。いま学問や教育には「目に見える〈成果〉を挙げられるのか」「〈国際的〉に意味があるのか」「社会にとって〈有用〉か」といった問が突きつけられている。そのような風潮の中で、本シンポジウムが対象とするような文人研究が正当な評価を得ることは困難であろう。忘れられた文人たちの研究に、国際的・社会的な意義を認める人は少ないであろうし、成果を得るまでには相当な手間と時間を要する。そんないま、敢えて「文雅の記憶」の重要性を論ずることは、成果主義・国際化・功利主義といった〈はやりことば〉を相対化するよすがにもなるのではないか。そうした文脈を意識しつつ、議論を進めてゆきたい。

なお、本シンポジウムにはもう一つ、学生に研究の現場を体感してもらうという教育的な目的がある。第一部の発表者に上智大学文学部国文学科の学生二名が含まれているのはそのためである。参加者各位の暖かいご指導をお願い申し上げる。

テーマが地味で、やや専門的すぎるきらいもあり、また広報も十分にできたとは言いがたかったため、どれほどの方に来ていただけるか不安であったが、当日は学内外から約三十名の参加者があった。

二　研究発表要旨

第一部における研究発表の要旨は以下の通り。

○佐藤温「幕末の変革期における文人のあり方―大橋訥庵と菊池・大橋家の人々に着目して―」

大橋訥庵は一般に儒家あるいは志士として知られるが、その足跡を追うと時局運動との関わりにおいて文人という肩書きを意識的に利用している様子が見えてくる。一例を挙げると、訥庵は安政の大地震の後に江戸の村松町から郊外の小梅村へ移居した際にその周知を目的として引札を作成するが、都下を離れて隠逸の暮らしを実現した喜びを詠む詩を中央に配しつつも、来訪日の指定や連絡手段の案内といった事務的な事項までも記載したその引札は、一見すると隠逸のアピールという矛盾を孕んだ性質を帯びているように映る。しかし、同時期の訥庵は、異国船来航に端を発する動乱期の到来を背景として著作や上申などを発表しながら時局に積極的に働きかけるも、それらが閑却されるという状況を経験していたことは注目される。そこから、この移居は不遇の時を経た儒者が自ら野に下り文人として生きるというストーリーを周到に演出したものである可能性が想像される。こうした訥庵の動向は、幕末期における文人という存在が社会への積極的な関与を前提とする性質のものへと変容していることを象徴する一例と考えられる。

そうした性質は訥庵の義弟である菊池教中についてもうかがわれる。教中は呉服や金融などで成功した江戸の大店佐野屋の当主であったが、新田開発事業に携わる中で対外戦争の到来を見据えて佐野屋一統の開発地への集団移住を構想するに至る。文芸にも造詣の深かった教中の同時期の詩作を検討すると、そこには先の訥庵と同様

に乱世の到来を現実的危機として視野に入れながら、新田開発地への隠遁・閑居という選択をした自身のあり方を文人として意識的に表象したと考えられる作品が見受けられる。

この両名に影響を与えた存在として興味深いのが、教中の実父、訥庵の養父である佐野屋の初代当主大橋淡雅で、淡雅は書画収集家として知られた一方、蛮社の獄における渡辺崋山の逮捕に際して救出活動に携わるなど、文人として自己表象を行いながら文芸との関わりを通して社会に働きかけようとする生き方を実践していた。こうした訥庵ら菊池・大橋家の人々の姿は、文人というアイデンティティが、幕末の変革期を生き抜く上で有効なものであったことを示唆していると考えられる。

○福井辰彦・中野未緒・高橋佳菜子「明治初年の菊池三渓」

菊池三渓は紀州藩の人、藩主慶福が十四代将軍を継いだことに伴って幕臣となり、将軍侍講を務めた。しかし、元治元年（一八六四）将軍上洛の間に起きた政変に巻き込まれ辞職。采地であった下総国結城郡宗道村に退隠、以降明治四年（一八八一）まで常総地方を転々とした。

これまで三渓の宗道村退隠の時期は、富村登『常総の漢詩人』（富村登遺稿出版後援会　一九六五）に依って、慶応二年（一八六六）、将軍家茂死去の折とされてきた。しかし、京都大学附属図書館所蔵の自筆資料には「歳戊辰、予乱を北総に避け、絹水の上に屏居す」（「信夫寛一郎墓碣銘」、原漢文〈以下同〉）と見え、宗道村に移ったのは明治元年のことであったと知れる。

当時の三渓の心境をよく表した自筆資料に「五一堂記」がある。三渓は、耳の聞こえない秋葉子磋、足の不自

由な宮本蘋香、目の見えない太田救、吃音の鈴鉆一を門下の「四才子」として挙げる。そして、欧陽脩が蔵書一万巻、集古録一千巻、琴一張、碁一局、酒一壺に、一老翁すなわち自分自身を加え、六一居士と号したのにならい、この四人に病弱な自分を加えて、寓居を「五一堂」と名付けた、と言う。逐われるように職を辞し、さらには主家も、采地も失った三渓には、それぞれに障害を抱え、困苦多き人生を強いられた四人の弟子たちが、あわれに、またちかしく、いとおしく思われたに違いない。一方、彼らを敢えて「才子」と呼び、欧陽脩の故事を持ち出したところには、そうした境遇に押しつぶされまいとする屈折した心理も読み取れよう。

明治三年閏十月、三渓は常総で交友を深めた年下の友人、信夫恕軒に書を送る（「与信夫文則書」）。その中で三渓は、翌四年に東京へ出て、文人として生きてゆくつもりだと決意を明かし、恕軒の才能が地方に埋もれてしまうことを惜しんで、ともに東京へ出るよう勧めている。また、「近日著す所の晴雪楼詩抄刻成る」との記述も見える。これに該当する版本は確認できないが、それは失意を脱し、文学を以て再び世に出ようとする覚悟を示すものであったろう。しかし、明治四年に三渓が東京へ移った形跡はなく、この計画は実現しなかったようである。

ただ、明治四年九月には南総から東京へと旅をしており、その折の詩と『酒痕灯影詩』にまとめている。三渓は、佐倉で依田学海を訪ね、東京では大槻磐渓、成島柳北、大沼枕山らと旧交を温めた。佐倉で詠んだ七言古詩「佐倉の客舎、談義民宗吾の事に及び慨然として歌を作る」には、明治新政府を批判するような言辞も見られ興味深い。

○新稲法子「宇田栗園―乙訓漢詩壇の父―」

幕末から明治の乙訓地域では乙訓漢詩壇というべきものが形成されていた。乙訓に漢詩の種を蒔いたのが、宇田栗園である。

この文雅の記憶は、そこに住む人たちの手によって掘り起こされた。乙訓漢詩壇を知るための主な資料は、現在長岡京市教育委員会が所蔵している正木彰家文書の詩稿であるが、発表者がこの詩稿の存在を知ったのは市民グループ、チーム乙訓のおかげである。

正木彰家文書の詩稿は正木聳山が参加した詩会の詠草と、聳山自身の原稿が中心で、全部で四十二種類、年代は明治十一年から三十七年まで、最初期の添削者が江馬天江と宇田栗園である。

栗園こと宇田淵は岩倉具視の側近として活躍した勤皇家として知られている。戊辰戦争に従軍し、維新後は京都にあって官僚として一生を終えた。向陽会の初代幹事を務め、歌集『栗廼花』がある。

栗園の漢詩集『静観亭遺稿』の谷鉄臣跋には、梁川星巌門下での栗園と藤井竹外のエピソードが記されている。竹外の『竹外二十八字詩』では栗園は大沼枕山・森春濤・江馬天江と並んで圏点を施しており、『星巌先生遺稿』の凡例を天江と連名で記し、『文久二十六家絶句』にも収録されている。

栗園が乙訓地域に漢詩を広めたのは文久年間から明治初期のことである。師の星巌が安政の大獄で捕縛される直前に亡くなり、監視下の栗園は地元乙訓で盛んに詩を作った。明治になって栗園は京都に移住したが、乙訓の人たちは詩社を結成し改めて栗園に指導を仰いだ。これが共研吟社である。

残された詩稿によると栗園没後も櫻井桂村を迎えて嚶求吟社が結成され、共研吟社と合わせると詩稿だけでも

五十三名にのぼる人々の名前がある。嚶求吟社については『嚶求吟社紀事』・『嚶求吟社宿題席題録』という二つの資料があり、当時の詩会の具体的な様子がわかる。

詩人栗園と乙訓漢詩壇が忘れ去られてしまった理由として、栗園が漢詩ではなく和歌を詠むようになったこと、漢詩文化そのものの終焉がある。勤皇家栗園は尊皇思想を持った梁川星巌の下では漢詩を詠み、岩倉具視を通じて明治天皇と繋がった状況では和歌を詠むというように、その文雅は状況に合わせて選んでいた。乙訓の詩社には参議院議員の正木聳山をはじめとする指導者層が多く、あたかも現代の茶会やゴルフのように立身出世の機会を提供していたが、漢詩が社会的なツールとして有効に働かなくなったころ、作者の裾野も急激に狭まっていったのではないか。乙訓漢詩壇に集った人々も、自らの人生の状況に合わせて漢詩という文雅を選択していたのであろう。

○長尾直茂「太宰府に遺る 吉嗣拝山関係資料について」

吉嗣拝山（一八四六～一九一五）、名は達、字は士辞、通称は達太郎（達之進）。拝山の号のほかに、蘇道人、古香、独臂翁、独掌居士とも号し、室名を古香庵・古香書屋と称した。筑前国御笠郡太宰府（福岡県太宰府市）に、円山四条派の町絵師梅仙の嫡男として生まれた。十九歳で広瀬青村に就いて漢学を修めた後、二十二歳の時に京都に上り、同じく筑前出身の南宗画家中西耕石に画を学んだ。明治に入ると大蔵省や太政官記録編集局に勤める機会を得たが、同四年七月九日大風雨の中を出仕する途次、神田橋附近で倒壊した家屋の下敷きとなり、重傷を負って人事不省に陥った。一命は取り留めるも右腕を截断するという憂き目に遇った。これ以降は文墨を以

て生きることを決意し、左手で能く書画を揮毫するに到った。また、切断した腕の骨を筆管として毛筆を製作し、これを骨筆と称して揮毫の際に用いた。明治十一年春、清に渡航して海上派の文人墨客と交遊した。帰国後は郷里太宰府に住居を構え、終生同地を離れることなく文墨の世界に生涯を送った。大正四年一月に病歿、享年七十であった。

今回の発表では、太宰府に今も残る吉嗣家に伝存した資料群のうち、太宰府市公文書館に寄託されて閲覧が可能となったものに関して、特に貴重な文書である以下の三点に絞って簡略な紹介を行った。

1．清国渡航時の筆談録

「筆舌録」、「筆以代舌図以留迹」、「筆以換舌字以換言」、「以筆換談」の四冊。明治十一年に中国に渡航した際に、現地で交わした筆談の記録、寓目した風景・書画・文物等の図、詠じた漢詩等を書き付けたもの。これまで存在が知られなかった資料。

2．魯西亜文範

『魯西亜文範』なる書籍を筆写した十冊のノート。別紙に、息鼓山の書で「拝山（廿六才ノ夏風災右腕切断）、爾後露西亜語研究、記念冊子」とある。若き拝山が、自らの進路をめぐって試行錯誤していたことを示す興味深い資料。

3．自筆詩文稿

明治三年から七年までの漢文を集めた『庚午文藁』、明治四十五年の東京旅游時の詩と大正二年の京都旅游時の詩を収めた『東游吟稿』等の自筆の詩文稿が遺る。拝山の詩集刊本に未輯録の作や大きな異同を存する

作もあり、自筆草稿として重要。

三　討議の概要

研究発表に続いて討議を行った。

討議においてまず話題にのぼったのは、幕末・明治期における文人の変質ないしは特殊性という問題であった。そもそも「文人」という語自体、明確に定義づけしづらいものではあるが、詩文書画など雅事に心を遊ばせる知識人・読書人のあり方、といったところが共通した理解であろう。少なくとも、文人にとって詩文書画は、あくまで余技・遊びであることが原則であるはずだ。しかし、幕末・明治期の文人においては、詩文書画を売り物にし、地方を遊歴して生活の資を得、書画会などでは名利を貪る、といったあり方が珍しくない。いわば〝職業的な文人〟という、よく考えてみれば奇妙な存在がしばしば見られるのである。こうした文人たちは、本来の文人の変質・堕落したあり方と捉えられがちであるが、むしろそれを社会に関与してゆくための意識的自己表象として、積極的に評価しようというのが佐藤氏の主張であった。換言すれば「文人」という語を、規範的に捉えるのではなく、時代とともに変容・拡大してゆく概念として再定義してみてはどうか、という提案であろう。そのように考えることで、文人という存在や彼らの学問・技芸が持っていた社会的・経済的な意味が、新たに見えてくると思われる。

〝職業的な文人〟という存在を可能にした社会的・経済的な条件・背景についても議論は及んだ。大きな要因として、漢学的教養や中国趣味が、地域的にも階層的にも、広く普及したことが挙げられるのはもちろんである

が、経済的な条件も重要である。大橋訥庵らの活動の背景には、養蚕や絹織物で富を蓄積していた北関東の富裕層の存在がある。一方、吉嗣拝山の人気と名声は、炭鉱業による筑豊地方の経済的繁栄に支えられていた部分が大きいであろう。さらに、長尾氏、新稲氏からは、文化的な背景の一例として煎茶が挙げられた。富裕層や趣味人のたしなみとして煎茶道が流行することによって、茶器、書画、詩文などを享受する場が保持され、文人に対する需要が生み出されていった。逆に言えば、そうした趣味・素養が廃れてゆくことにともなって、漢詩文が衰退し、「文人」という〝職業〟が成り立たなくなっていったのだとも考えられる。近代に入って、なぜ漢文学は衰退していったのか、という問は極めて重要で、また解答の難しい問題であるが、このように周辺の趣味・技芸の変遷と関わらせて考えてみることも有効であろう。

研究発表と討議を通じて、幕末・明治期の文人の多様性を確認し、また彼らの事蹟を研究することが社会的・経済的な広がりを持った豊かな問題性を孕んでいることを明らかにできた。だが一方で、稿者には気がかりなことがあった。それは文人研究のような「文学研究」が、史学や社会学の文脈の中で「史料」として解体されてしまうのではないか、という危惧である。成果主義・功利主義が幅を利かせる現在の状況の中で、「文学研究」にも社会的・経済的な問題性が含まれているのだと主張することが（あるいは「文学研究」を〝国際的に開いてゆく〟ことが）、皮肉にも「文学」という学問領野が元々持っていたはずの固有の価値や問題意識を抹殺することにつながっているのではないか。こうした懸念に対して、三人の発表者からは、文学作品そのものが持つ魅力や意味を伝えることの重要性と困難さが指摘された。十分議論を深めることはできなかったが、今後も考えてゆかねばならない重大な問題であるように思われる。

四　むすび

以上のように本シンポジウムは実り多く、有意義なものとなった。また、終始和やかな雰囲気で（語弊を恐れずに言えば楽しく）会を進められたことも印象的だった。稿者としては、本シンポジウムを通じて、人文科学軽視の風潮に抗う勇気を鼓舞していただいたような思いである。

このような機会を与えてくださり、準備の段階からお力添えくださった合山氏に感謝申し上げる。

また何より、発表者をはじめ、当日ご参加くださった方々に心よりお礼申し上げる。